

ART FUL

2025.10 | 83

松本市美術館 NEWS [あーとふる]



4

ART EXHIBITION GUIDE 当館学芸員 中澤 聡



2



1

東京に生まれ育ち、中央画壇の中心的存在として活躍していた画家・石井柏亭^{（いしゐ かしやう）}（1882-1958年）の姿は、晩年、松本にありました。1945（昭和20）年3月、柏亭は家族とともに松本の浅間温泉に疎開します。東京大空襲により自宅とアトリエ、貴重な資料など多くを失いますが、それでも信州の清らかな自然が織りなす風景に心を動かされ、絵筆を取り続けます。

「すきとおる 水絵具もてい や澄める
空と水とを 写すよろこび」

疎開した年、浅間温泉にて詠んだ短歌には、松本の自然を目前に、描くことへの純粹なよろこびを抱く柏亭の心境が表れています。終戦後も松本に留まることを決めた柏亭は、亡くなるまでの約13年間で松本の風景をモチーフとした作品を多く手がけました。本展では、そうした作品も見どころのひとつで



3

す。浅間から北アルプスの山々を望む景色^{（1）}、緑深い木立が茂る間を流れる薄川^{（2）}や昭和の大改修を終えた国宝・松本城天守の堂々たる姿^{（3）}。画面には、写実を重んじた柏亭の手によって、ありし日の松本の風景が広がります。制作活動の傍ら、柏亭は若手の育成や美術団体の結成、また、地方での博物館施設の必要性を説き、愛蔵した作品を松本市に寄贈^{（4）}するなど、信州の戦後美術の再興と発展にも尽力しました。

柏亭の疎開から80年。本展では初期から晩年までの代表作に加え、信州ゆかりの作品・資料を通して、その多彩な画業をご紹介します。描くことへの情熱を失わず制作を続けた画家の姿を感じていただければ幸いです。

石井^{Hakutei}柏亭

えがくよろこび

80 YEARS AFTER THE WAR ISHII HAKUTEI THE JOY OF PAINTING

会 期／2025年10月11日（土）～12月7日（日） 作品保護のため、会期中に一部展示替えがあります。[前期]10月11日（土）～11月9日（日） [後期]11月11日（火）～12月7日（日）
会館時間／9:00～17:00（入場は16:30まで）
休 館 日／月曜日（休日の場合は翌平日）
観 覧 料／一般1,500円、大学生・70歳以上の松本市民1,000円

※電子チケット購入の場合は各100円引き ※高校生以下無料、障がい者手帳携帯者とその介助者1名無料
※20名以上の団体は窓口料金から各200円引き（当日窓口販売のみ）
※大学生・70歳以上の松本市民は、観覧当日、証明書（学生証、免許証等）の提示が必要

主催／松本市美術館 共催／SBC信越放送、信濃毎日新聞社、MGプレス、市民タイムス 特別協力／一般社団法人石井柏亭絵の旅の会 協力／サンリン株式会社

1.《浅間眺望》1945年 菊之湯蔵 2.《すすき川合流》1948年 個人蔵 3.《松本城》1955年 松本市立博物館蔵 4.《紅蓮》1918年 松本市美術館蔵

松本市美術館 NEWS [あーとふる 82]

48回

ポルカドット号探検記

絵筆とペン 松本市美術館館長 小川 稔

戦後80年、昭和元年から100年目という今年、石井柏亭の回顧展は、信州が近代美術の懐かしい故郷であったことを思い返す機会になるだろう。四方を山岳に守られたこの地には、近代美術に関わった多くの人の記憶が眠っている。東京下町生まれの石井柏亭もその一人。東京空襲で焼け出され、浅間温泉に疎開、そのまま戦後は中信美術会の創立に尽力するなど、美術を愛するこの地域の人々に多く

の遺産を遺した。

石井家は美術一家で、柏亭の祖父と父は日本画家、弟は信州とも縁が深かった彫刻家・石井鶴三^{（つぐさ）}だ。だが、柏亭は、画家だけでなく文筆家としての顔を持つ。自ら見聞きした近代美術の現場を客観的な視点で書いた名著『日本絵画三代志』がある。絵筆とペンの二刀流で活動したユニークな存在だったのだ。

温和で親しみやすい画風は、“非凡な凡人”と称された柏亭の人柄を思わせる。だが、ここに明治初期の洋画開拓者から受け継いだエッセンスがある。常に海外の動向から影響を受けてきたわが国の絵画史だが、それに左右されず、時間をかけ国内で成熟した柏亭の画風には強い個性に代わる何かがあり、鑑賞者を飽きさせない。美術が特別の存在でないことを教えてくれる柏亭作品だが、その戦後はここ松本に始まる。1945（昭和20）年、終戦の年の秋、柏亭は梓川と奈良井川が合流する場所を選んで『山河在^{（さんかざり）}』を描いた。国は敗れたが、変わらず流れる川を見つめながら柏亭は何を思っていたのだろう。



石井柏亭《山河在》1945年 松本市美術館蔵

Relay Essay

楽しい気持ちを
忘れずに

当館学芸員 藤原 裕希

祖母のように描くことはできなかったが、自分の手で何かを表現することの楽しさを知ったあの時間は、今でも大切な思い出となっている。

そして現在、私は美術館で学芸員として働いている。日々、様々な作品に接する機会があり、作家たちの情熱と表現に触れることで、学芸員という立場ではあるが、同時に一人の表現者としての自分がそうした作品に刺激を受けているのを感じる。美術館の静謐な空間で作品と向き合うたびに、「自分も何かを描きたい」という衝動が芽生えてくる。そうした衝動から生まれる私の作品は、誰かに見せるためというよりも自分の内面と向き合うためのものだが、思いのまま筆を走らせる時間は心が落ち着く大切なひとときだ。

さて、話はかわって、当館では10月11日（土）より、明治末から昭和期にかけて活躍した画家・石井柏亭の展覧会を開催する。柏亭は多彩な活動を展開し、その生涯の多くを絵に関することに向けた人物で、晩年は信州の美術振興に尽力した。

展覧会タイトルは「戦後80年 石井柏亭 えがくよろこび」。忙しい日々で時間に追われてしまうこともあるが、幼い頃の祖母との思い出、学芸員として美術に携わる機会を得たことに感謝をしながら、タイトルにある「えがくよろこび」のように、表現することの楽しさと喜びを忘れず、これから先も自分の思うままに絵を描き続けていきたい。

私は、昔から趣味で絵を描き続けている。特段絵が上手なわけではないが、絵を描くという行為が日々の暮らしのちょっとした「生きがい」となっている。その原点は、幼い頃に祖母と一緒に過ごした時間にある。当時、祖母は庭に生える草花や野菜を前にして、静かに、繊細な筆遣いで絵を描いていた。それを見ながら、私も真似をして一緒に紙に向かう。とても



松本市美術館 NEWS
あーとふる 編集・発行

松本市美術館
MATSUMOTO CITY MUSEUM OF ART

〒390-0811 長野県松本市中央4-2-22
tel 0263-39-7400 fax 0263-39-3400
https://matsumoto-artmuse.jp

松本市美術館公式 SNSはこちらから ▶



X



Instagram





滝川太郎は、松本市生まれの画家。両親を早くに失った後、働く傍ら絵に興味を持ち、1920(大正9)年頃に上京する。太平洋画会研究所に通い、石井柏亭の書生となり、さらに文化学院図書室に勤務しながら絵を学ぶ。1927(昭和2)年、第14回二科展に初入選し、以降1930(昭和5)年まで連続入選。その後様々な人の援助を



《瞰望夏景》

当館学芸員 稲村純子

受けて渡欧し、10年間の滞在で西洋絵画への造詣を深めた。帰国後は個展の他、一水会展等で作品を発表。松本との関係も続いており、地元

の全信州美術展や長野県展でも活躍した。

太平洋画会研究所、文化学院、二科展、一水会、全信州美術展などはすべて石井柏亭が関わっていた団体や展覧会であり、滝川の画業には常に、尊敬し慕った柏亭の影響があったことが分かる。柏亭が松本市の浅間温泉に疎開する際は、滝川も尽力した。

本作は、二科展に初入選した作品である。勤めていた東京神田駿河台の文化学院近くの坂から、眼下に広がる神保町あたりを描いたものと思われる。この頃、滝川は24歳。2年後に中国、その翌年には渡欧するという時期で、暗い塀のむこう側にある街は、陽を受けて明るく広がっている。絶妙なバランスで配された明暗のコントラストが、夏の空気をより鮮明に伝える要素となっている。若き滝川の情熱が込められた、渾身の一作である。

当時、滝川と同じように、柏亭もこの景色をみていたことだろう。

作者…滝川太郎(1903-1970)
作品名…瞰望夏景
制作年…1927(昭和2)年
技法・材質…油彩・キャンバス
サイズ…61・5×116・5cm

本作は、「石井柏亭展」に合わせて開催するコレクション展示(会期2025年11月5日〜2026年2月1日)でご覧いただけます。



Workshop report

記念講演会「ロイヤル コペンハーゲン ビング オー グレンダール」

7月20日(日)、特別展「日欧プライベートコレクション ロイヤル コペンハーゲンと北欧デザインの煌めき アール・ヌーヴォーからモダンへ」の記念講演会が行われました。

講演会の講師は、日本大学教授を務める傍ら、アール・ヌーヴォー装飾磁器のコレクターとしても活動をされている塩川博義氏。展覧会にも多くの所蔵品を出品いただいております。本講演では、同時期にデンマークの陶磁器メーカーとして人気を競い合った「ロイヤル コペンハーゲン」と「ビング オー グレンダール」の2大ブランドを中心にお話いただきました。

装飾磁器の始まりや、各メーカーのアール・ヌーヴォー装飾磁器における釉下彩技術の変遷、北欧のアール・ヌーヴォー装飾磁器をコレクションするきっかけとなった出会い、日本の陶器師と協力をして、コレクション作品の一部の復元を行った話など、展覧会内容を深く掘り下げる話から、コレクターとしてのエピソードまで、普段なかなか伺うことのできない話が盛りだくさん。参加者の方も終始熱心に講演を聞いていました。



当館学芸員 原澤 知也

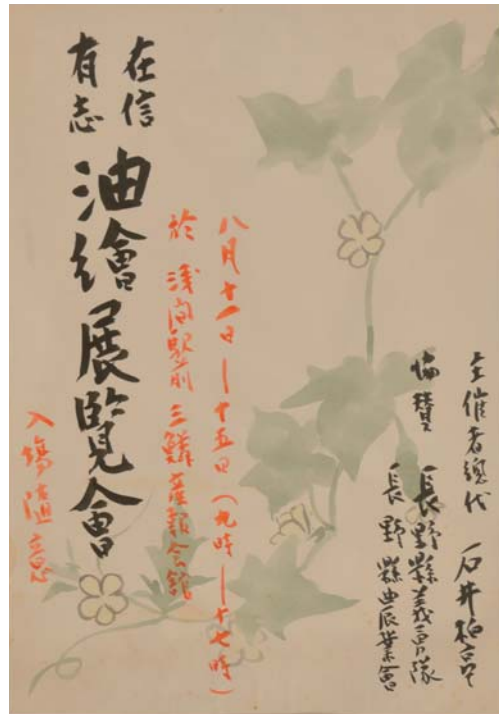


《在信有志油絵展覧会》

図は、石井柏亭、小平鼎、須山計一らが主体となって、1945(昭和20)年8月11日から15日にかけて浅間温泉の三鱗産報会館※の2階で開催された「在信有志油絵展覧会」の開催を知らせるポスターである。柏亭の肉筆で、浅間温泉や松本市内に掲示するため10枚ほど制作され、配られた。この展覧会は、当初長野県人と長野県内に転住した画家たちの作品を展示する計画で、開催地を長野、松本、諏訪とし、時期を7月下旬とした。しかし、太平洋戦争の戦況の悪化で断念、浅間温泉の三鱗産報会館で小規模の開催へと変更になった。展覧会の出品作家は、柏亭、小平、須山、高橋庸男、中村善策、木下義謙、中村琢二、関四郎五郎、滝川太郎、石井ゆたか、石井三冬の11名で、20点の作品が40畳ほどの会場に飾られた。終戦間際の展覧会開催は、信州美術の戦後の再興への端緒となった。

柏亭らは、この展覧会を弾みに、終戦からわずか3ヶ月後の11月16日から12月5日にかけて、長野県在住作家の作品を一堂に会した第1回全信州美術展覧会を開催する。全信州美術展は第3回まで続き、1948(昭和23)年からは、長野県展となり現在に至る。また、1946(昭和21)年には、全信州美術展の出品者により、信州美術会が結成され、初代会長に町田曲江、副会長に柏亭が就任し、翌年には柏亭が会長となった。

二科会や一水会の創設にかかわるなど、中央画壇において中心的存在であった柏亭は、信州でもその手腕を発揮し、疎開作家や地元作家をとりまとめ、戦後の信州美術界を牽引した。



《「在信有志油絵展覧会」ポスター》1945年

※三鱗産報会館は、浅間温泉の筑摩電鉄(現アルピコ交通)の松本から浅間温泉間を走っていた路面電車「浅間線」の駅前にあった信濃三鱗株式会社(現サンリン株式会社)の福祉施設。



身近な ART 「布」

当館学芸員 北原 麻椰



先日、雑貨店で布の端切れを購入した。袋に詰められた端切れのセットは大小様々な形でそれぞれデザインも違い、同じものはひとつとしてない。どれにしようか迷いながらも心が弾む瞬間だった。家に持ち帰り、母と一緒に端切れを使って小物づくりに挑戦した。無地のTシャツに縫い付けたワンポイント、くるみボタンや髪留め、スマートフォンケースのアクセントなど、どれも身近な道具や装飾品にほんの少しの手を加えたただだが、愛着のわく特別な日用品に変わる。裁縫は得意ではなかったが、布を型抜いたり、金具で挟んでボタンにしたりする作業は思いのほか簡単だった。蝶や植物、自然をモチーフとした優しいデザイン。見ているだけでも癒されるが、小さな切れ端でも確かな存在感があり、模様の切り取り方で印象が変わるのもまた面白い。

次はポーチでも作ってみようか、どんな柄の組み合わせにしてみようか。そんな会話が弾み、楽しみがまた広がっていく。何気ない手作りの時間であつたが、暮らした彩りを与え、いつの間にか大切な思い出になっていた。